大洲市 中学生版 歴史副読本 改訂版

ふるさと大洲 歴史物語

肱川(ひじかわ)からの贈り物

大洲市教育委員会

巻頭言

「大洲って、どんな町ですか？」

市外の方と話をするとよく聞かれる質問です。中学生の皆さんは、どう答えますか。反対に、他の地域の歴史や文化を聞いたとき、自分の地域の歴史や文化を知らなければ、違いを比較することができず、本当に相手の地域のことを理解できないかもしれません。わが町の歴史を知ることは、他の地域や異文化を理解する出発点になります。

大洲市歴史副読本は、安土・桃山時代から現在まで先人たちが築き、語り継いできた当市の歴史や守ってきた文化をまとめています。皆さんがこれから出会う友人や恋人、職場の同僚や上司、大洲を訪れる旅行者などに大洲のことを紹介する材料になります。どうか自分の言葉で大洲の歴史や文化を多くの方々に伝えることができる人になってください。

この本に書いてあることは、大洲の長い歴史の一部分にすぎません。この本が、もっと詳しく大洲のことを勉強するきっかけとなり、そして、将来の道標になれば幸いです。

大洲で生まれたこと、大洲で育ったことを誇りに思い、大人になったとき、未来の子供たちにも大洲の歴史を語り継いでいってくれることを願っています。

２０１６（平成28）年３月

前大洲市長　清　水　　裕

「汝の郷土を開発する者は汝自らなり」

この言葉は、昭和29年から旧大洲市の初代教育長を務められ、上須戒で明玄農士道場を創設された梶谷永五郎氏の教えです。朝起きて顔を洗う時、当たり前のように蛇口から水が出るのは、水道を引くためにご尽力いただいた先人のお陰です。このように今私たちが豊かな生活を送れるのは、先人の努力の積み重ねがあるからです。

「なぜ今があるのか?」を考えてみましょう。

物事を考える時、私たちは過去の自分の経験に照らしながら、どうするかを考え判断しています。また、自分が経験していないことを学ぶことで、未来を考えるためのヒントを得ているのです。

この歴史副読本にも、未来を考える多くのヒントが書かれています。大洲の歴史や文化、先人の営みを学びふるさと大洲への思いを深め、この学びをきっかけにして、世界の歴史や文化への関心を高めてほしいと思っています。そして、多くの人に出会って話を聞き、いろいろな本を読み、それぞれの目標に向かうためのヒントを探しながら未来に向けてチャレンジしてください。

中学生の皆さんが、これからの大洲の歴史に、新たな一頁を加えてくださり、そして、それぞれの人生を力強く切り拓いていかれることを期待しています。

2020（令和2）年12月

大洲市長　二　宮　隆　久

はじめに
私は、肱川。……5

第1章 近世の始まり ～安土桃山時代

❶ 大洲城の始まりと藤堂高虎……12
❷ 日本儒学に影響を与えた 姜沆……13
❸ 金山出石寺と十夜ヶ橋……15
❹ 大洲城と脇坂安治……16

第2章 大洲藩 加藤家の治世

❶ 事業
(1)初代藩主 加藤貞泰……19
(2)2代藩主 加藤泰興……20
(3)領内の様子……21
(4)江戸時代の治水……22

❷ 学問
(1)日本陽明学の祖 中江藤樹……25
(2)仏教を広めた盤珪永琢……29
(3)県内初の藩校設立に尽力した川田雄琴……31

❸ 文化・伝承
(1)豫州大洲好人録……32
(2)主馬神伝流……33
(3)大谷文楽……36
(4)河辺鎮縄神楽……37
(5)藤縄神楽……39

❹ 産業
(1)天下に独歩する大洲の和紙……41
(2)大洲藩が奨励した内子の木蝋……43
(3)大洲藩の特産品だった砥部焼……44

第3章 激動の幕末 龍馬の脱藩と大洲での学問

❶ 脱藩の道 坂本龍馬といろは丸……48

❷ 新しい学問
(1)国学の研究に力を尽くした矢野玄道……50
(2)日本初の電信実験を成功させた三瀬諸淵……52
(3)五稜郭を設計した武田成章……54

肱川の分身
アユちゃん

いつの頃からか肱川に住み着いている。見た目は元気いっぱいの女の子だが、移りゆくふるさと大洲の歴史をずっと見守ってきた、歴史の生き証人である。

肱川や大洲のことを誰よりも愛している。坂本龍馬が脱藩した際には、龍馬の道案内をしたといううわさも。

第4章 明治の発展

❶ 大洲県大参事 山本尚徳……57
❷ 臥龍山荘をつくった河内寅次郎……59
❸ 懸け造り……62
❹ 肱川の水運の歴史……63
❺ 養蚕業・製糸業の盛衰……65
❻ おおず赤煉瓦館の建物の特徴……66

第5章 大正・昭和・平成の展開

❶ 大正時代
(1)肱川への架橋……69
(2)肱川下流域の交通の発展……70
❷ 昭和・平成の時代
(1)水害との戦いと発展する町大洲……71
(2)大洲の観光産業の振興……73
(3)肱南地区の古い町並みの活用……75
(4)大洲の製糸業と林業……75
(5)長浜大橋……77
(6)西村兵太郎……79
(7)長浜水族館……80

第6章 大洲市ゆかりの人々

❶ 名誉市民の称号が贈られた人々
(1)加藤泰通 (2)植木秀幹……83
(3)神山諦鑁 (4)西田司……84
(5)中村修二 (6)綾井章江……85
(7)山田庄太郎 (8)池田萬千雄……86
❷ ゆかりの人物
(1)松本零士……87
(2)簡野道明……87
行雲流水……88
大洲の歩み……105
松本零士インタビュー……111
おわりに……113
大洲ふるさとマップ……115

イラスト
しらかたみお

はじめに

私は、肱川（ひじかわ）。

太古の昔から、この地域に降った雨水を集めて、私は、瀬戸内海の伊予灘へと流れ続けています。ひとたび多くの雨が降れば、雨樋（あまどい）が雨水を集め、勢いよく流れるように、私は、多くの地域で氾濫を起こすこともたびたびありました。そして、人々が丹精込めて育てた作物を流し去り、人々の暮らしに試練を与えてしまいました。江戸時代には3年に一度、明治時代以降、昭和の前半にかけては2年半に一度の割合で氾濫を繰り返していました。なかでも昭和18年の水害は規模が大きく、大洲盆地が海のようになり、若宮地区では家屋の2階まで水が達するほどでした。34人の犠牲者と11人の行方不明者を出し、多くの家屋を流したり倒壊させたりして大きな被害を与えてしまいました。

そこで、人々は、私の氾濫を治めるために昭和34年に鹿野川ダムを作り、治水の安全度が高められました。

しかし、私は流域に被害を与えただけではあり

大洲の歴史を見つめて。

ません。肥沃な土壌をもたらし、豊かな作物を育てるという恵みも与えてきました。

私の始まりは、西予市宇和町正信の標高４６０ｍの地点です。

私の流れは、人のひじを曲げたような形になっているところが多く、そのため人々は、私を「肱川」と名付けたのです。（諸説あり、コラム参照）

正信で発した流れは、西予市の宇和町や野村町、そして大洲市へと進み、河口の長浜に至ります。この間には、４７４本の支川（しせん）があり、その流域には、大洲市はもちろん、西予市や内子町、伊予市、砥部町が含まれ、私の流れを利用して、経済や文化の面でも盛んに交流が行われたものです。

私の流れは、とても穏やかで、水量も豊かですから、明治の末期に道路が開通するまでは、生活物資などの運搬路や産業の発達を支える手段として、多くの人々に利用され、とても感謝されました。

そして、長い歴史の中で、私は、いろいろなことを見てきました。

例えば、神話の時代には、次のようなことが思い出に残っています。大国主命（おおくにぬしのみこと）と少彦名命（すくなひこなのみこと）は、全国の国づくりのために各地を巡っていらっしゃ

肱川と富士山
（平成24年頃）

肱川の名の由来

歴史上初めて肱川が登場するのは、１６３８（寛永15）年で賢明（京都大覚寺権少僧正）による「空性法親王四国霊場巡行記」の中で「比志の大津城、皆比志川を楯にして」と記載があります。その名の由来はいくつか言い伝えがあり、地蔵ヶ嶽城建設に伴う人柱説や洪水を沈静化させるためのいけにえ説、肱川の流路の形態からくる説などがあります。

肱川流域図

「肱川」ってどんな川？

西予市宇和町正信の標高460mの地点に源流があります。河口は、源流のほぼ北方、直線距離にすると18kmの所にあります。このわずか18kmを、何と103kmをかけて流れているのです。つまり、1km下るごとに約4.5m標高が下がる程度で、川の傾斜が緩やかでゆったりと流れているのが分かります。

また、支川の数が474本もあり、これは全国の河川の中で5番目に多い数なのです。それらの支川から集まった水が一本の本流になるので、大雨のときには洪水が発生しています。

さらに、通常の河川の河口部には、三角州が発達しますが肱川には見られません。こ

いました。あのときは、ちょうど、讃岐を経て、伊予の国に来られたときのことでしたが、少彦名命が病のために倒れられました。そのとき、少彦名命を温泉に入浴させたところ、たちまち病気が治ったのです。この湯が、今の松山市の道後温泉に当たり、熟田津石湯（にぎたつのいわゆ）と呼ばれていました。

また、少彦名命が道後を出て、壺神山（つぼかみやま）を通り、菅田の地に至り、川を渡ろうとしたときのことです。ある老婆に川の深さを尋ねると、老婆から「そこは深い」と言われたところを「そこは浅い」と聞き間違えてしまい、激流に飲み込まれて深みに入り、亡くなられたということもありました。

私の体の一部で、国づくりに励まれた神様が命を落とされたと伝わっているのは悲しいことです。そこで、後世に少彦名命の遺徳をしのんでもらうために少彦名神社が造られたのです。

最後に、肱川についての特徴と言えば「肱川あらし」を挙げない訳にはいけません。私は四方を山に囲まれた大洲盆地の中を流れています。秋から冬は、昼間の日差しで蒸発した水蒸気が、夜間冷やされて、しばしば霧が発生します。この霧は、大洲盆地に深い霧の海を作り、長浜に流れていって「肱川あらし」という現象を起こすのです。古来から、私の周りで生活を営んできた人々は、私が作る様々な自然現象と共生し、今の大洲市の文化を作り上げてきたのです。

そして、私は、今もなお、太古の昔より現在までこの地にあり、これからもこの地で暮らす人々とともに生きていきます。

それでは、ここからは私に代わり本誌の語り部である「アユ」に伝えさせます。

れは、五郎から長浜にかけての地域が、隆起地帯であることに原因があります。

この地域には、もともと肱川が流れていました。２００万年前ごろ、この地域が隆起を始めました。しかし、その隆起量は10年で数㎜であったため、隆起した部分を肱川の流れが削り取り、削られなかった部分は山として残り、河口まで山が迫る地形になってしまったのです。このような河川を先行性河川といいます。

秋になると、その谷になっている部分を、大洲盆地で発生した霧が一気に伊予灘に向けて吹き抜けていきます。これが「肱川あらし」です。

肱川は、私たち大洲市民にとっては、ごく身近な川ですが、形態も構造も、気象現象も大変珍しい川なのです。

伊予灘から見た肱川河口
国土交通省大洲河川国道事務所提供

若宮地区での水害の様子　1943（昭和18）年７月

神南山山頂から見た肱川下流域

【長浜大橋】日本最古の跳ね上げ式道路可動橋で、長浜を象徴する景色です。

第1章 近世の始まり

～安土桃山時代

1467年、京都で起こった応仁の乱の後、勢力を失った室町幕府に代わって、日本各地で戦国大名がそれぞれの政治を繰り広げました。織田信長や豊臣秀吉など、歴史的にも有名な人物が活躍したこの時代、わが大洲地方ではどんな人物が活躍し、どのようなことが起こっていたのか見ていきましょう。

藤堂高虎肖像（複製）（原資料西蓮寺蔵／複製愛媛県歴史文化博物館蔵）

大洲城に行ってみよう。

所在地：大洲市大洲903
開館時間：9時～17時
（札止め16時30分）
定休日：年中無休
観覧料：大人550円
小人220円
（中学生以下）
臥龍山荘（がりゅうさんそう）との共通券：
大人880円
小人330円
2020（令和2）年6月現在

❶ 大洲城の始まりと藤堂高虎（1556～1630）

大洲市の中心を流れる肱川のほとりには、2004（平成16）年に往時の姿で復元された天守閣が建っています。大洲市のシンボルである大洲城の歴史は、鎌倉時代末期、伊予国守護宇都宮豊房の築いた地蔵ヶ嶽城に始まると言われています。中世の頃は、宇都宮氏の居城でしたが、1585年の豊臣秀吉の四国平定後、伊予国の領主となった小早川隆景による城の統廃合により、大洲城（当時は大津城）は城として残されました。その後、様々な人が城主となりましたが、その中でも、後の大洲を形成していくにあたり、大きな役割を果たした人物が、**藤堂高虎**と**脇坂安治**です。

旧大洲城（大洲市立博物館蔵）

高虎は、近江国（現在の滋賀県）出身です。たくさんの城を築いたことで、築城の名人として知られており、愛媛県内でも今治城や宇和島城などの名城を築いてきました。そして、大洲城もその高虎によって修築されました。

1595年、高虎は伊予宇和島7万石を豊臣秀吉から与えられました。すると、すぐに板島城（現在の宇和島城）の築城に取りかかりました。その当時、大津（現在の大洲）は蔵入地代官として高虎が治めていたので、板島城を造っている間、高虎は大洲城（当時は大津城）に居城しました。その2年後の1597年、秀吉は二度目の朝鮮出兵（慶長の役）を行いました。このとき、高虎は大洲から朝鮮に向かって出陣しました。それに先立って**金山出石寺**に参詣し、武運長久を祈願したと

大洲城年表

1331	宇都宮豊房が地蔵ヶ嶽に築城
1585	小早川隆景の枝城となる
1587	戸田勝隆が入城
1595	藤堂高虎が入城
1609	脇坂安治が入城
1617	加藤貞泰が入城
1888（明治21）	海南新聞に天守取り壊し作業の記事
1953（昭和28）	大洲城趾が県指定史跡に指定
2002（平成14）	天守閣復元工事起工
2004（平成16）	天守閣復元工事完成

「日本高麗暠戦之記」（出石寺住職快慶の著）に記録が残っています。翌年、高虎は秀吉に慶長の役での戦功を認められ1万石を加増されると、戦利品の**朝鮮鐘**を金山出石寺に奉納しました。また、秀吉の死後、徳川家康からも信任を得て、関ヶ原の戦いでは東軍（徳川家康方）に加わり、西軍（石田三成方）と戦って手柄を立て、伊予半国20万石（今治、宇和島）を治めることになりました。その後、高虎は、1608年には津城（三重県津市）に入りました。

出石寺の朝鮮鐘

❷ 日本儒学に影響を与えた 姜沆（1567～1618）

姜　沆（村上恒夫氏提供）

慶長の役に出兵した藤堂高虎は、1597年10月に**朝鮮半島から1000人余りの捕虜を連れて大洲に戻りました。**その中に朝鮮の儒学者である姜沆が含まれていました。姜沆は、大洲で10か月ほど過ごし、京都に移った後は、近世儒学の祖と言われた藤原惺窩と交友し、日本の儒学に大きな影響を与えました。

姜沆が大洲を脱走！

1598年5月25日、朝鮮に帰りたい一心の姜沆は、2人の仲間とともに大洲を脱走しました。3日後、宇和島に着き、築城中の宇和島城の門に秀吉に対する落書きをして、薬師谷渓谷に隠れました。そこで修行中の老僧に助けを求めましたが、結局、宇和島の兵に捕らえられました。刑場で処罰されそうになりましたが、一人の武士に助けられ、再び大洲に戻ることができました。

姜沆は、日本での約3年の生活の様子を「看羊録」として書き残しています。この本には、姜沆が日本で見聞きしたことや日本の内情、国土の特徴、諸大名の情勢などが細かく書かれています。さらに、日本で見聞きしたことを通して感じた様々な思いも見事な漢詩で表されています。また、朝鮮から大洲までの行程や大洲での捕虜としての生活の様子なども書かれています。

それによると、姜沆たちは船で日本へ連行され、対馬（長崎県）から名護屋（佐賀県唐津市）、下関を経て、長浜に着きました。上陸後、徒歩で大洲に向かっていたところ、川を渡っている途中、力尽きて流されてしまいました。そのとき、付近にいた農夫が、流れの中から姜沆たちを助け上げ、家から雑炊と茶を持ってきてくれました。姜沆は「倭人（日本人）の中にもかくも至誠の人があるのか」と書き残しています。

さて、姜沆は、当時の大洲城の付近の様子として、「城は高い山の絶頂にあり、山麓には長い川が流れ、清らかな淵となっている」と書いています。姜沆は、この大洲城下で、約10か月生活をしました。その間、学者ということもあって、生活や行動は優遇されていたようで、外出も許され、大洲城下や金山出石寺の僧などと漢詩の交換などを行って交流を深めていました。

姜沆が大洲に来てから約４００年後の１９９０（平成２）年３月、姜沆の功績をたたえ、大洲城の一角である大洲市民会館に「鴻儒姜沆顕彰碑」という石碑が建てられました。

姜沆顕彰碑（市民会館前）

姜沆のその後

１５９８年、藤堂高虎は姜沆をはじめとする大洲の捕虜を京都に移しました。京都に移された姜沆は、藤原惺窩たちに儒教を教えました。豊臣秀吉の死後、徳川家康は朝鮮と和解し、１６００年４月、姜沆一族は朝鮮に帰ることができました。故郷の霊光で子弟を教え、１６１８年に52歳で永眠しました。

③ 金山出石寺と十夜ヶ橋

姜沆と交流のあった僧が住んでいた「金山出石寺」は、標高８２０ｍの霊峰出石山山頂にあります。真言宗御室派別格本山として１３００年の歴史がある名刹で、多くの参拝者が訪れます。また、瀬戸内海国立公園の一部にもなっており、山頂からは、中国や九州地方、そして、石鎚山をはじめとした四国の連山が望めます。

奈良時代初期に、猟師が鹿を追い金山に入ったところ、山中に地鳴りが響き渡り、岩が割けて千手千眼観世音菩薩像が現れたと伝えられ、それが出石寺の本尊となっています。また、開山当初は「雲峰山」と呼ばれていましたが、平安時代前期、空海（弘法大師）が雪中修行を行った際に、この山に鉱脈があることが分かり、名称を金山と改めたと伝えられています。現在、出石寺は「四国別格二十霊場」の一つとして親しまれています。

高虎が奉納したと伝えられる「朝鮮鐘」は国指定の重要文化財であり、本堂にある「木造釈迦如来坐像」は県指定の有形文化財となっています。

「四国別格二十霊場」と言われる寺は、市内にもう一つあります。それは、十夜ヶ橋永徳寺です。ここは、弘法大師が野宿をしたと伝わる四国霊場唯一の野宿修行の場です。

今から約１２００年前、弘法大師がこの地を訪れたとき、近くに民家がなかったので、橋の下で一夜を過ごしました。そのときに、「人々は生活するのが精一杯で、自分のことを考える時間もなく、悟りを得ることができません。充実した生活や安らかな生活をするにはどうしたらよいか考えていると、一晩が十日ほどにも思えるのです。」ということで、その橋を**「十夜ヶ橋」**と名付けられたと言われています。

大洲の人々は、自分たちを思いやってくださった弘法大師に感謝して、橋の下に横になって

金山出石寺

十夜ヶ橋の寝弘法

所在地：大洲市東大洲１８０８

いる大師様を今もお祭りしているのです。

④ 大洲城と脇坂安治（1554～1626）

1608年、藤堂高虎は津城に国替えとなり、大洲城を去りました。代わりに、1609年9月に新しい城主として、**淡路国洲本城（現在の兵庫県洲本市）から脇坂安治が大洲城に入りました。**

安治も高虎と同じ近江国（現在の滋賀県）の出身です。はじめは明智光秀に仕えていましたが、後に豊臣秀吉に仕えるようになりました。1583年、安治は賤ヶ岳での柴田勝家との合戦で抜群の功績をあげ、福島正則や加藤清正、加藤嘉明らとともに、**「賤ヶ岳七本槍」**の一人として賞賛されました。その後も安治は秀吉の家臣として多くの合戦で活躍し、1585年8月には大和国高取城主、10月には淡路国洲本城主となりました。そして、1600年の関ヶ原の戦いでは、小早川秀秋の軍に所属し、西軍（石田三成方）から東軍（徳川家康方）に加わり勝利に貢献しました。その功績が認められ、1609年に5万3500石で大洲に入りました。

大洲城に入った安治は、家臣に与えた所

脇坂安治（たつの市歴史文化資料館提供）

大洲城の木造復元、その秘話を大工さんが語る

大洲城の木造復元は市民の長年の夢だったので、我々地元の大工も「ぜひ携わらせていただきたい」と直訴。城郭建築のプロ集団とタッグを組み、地元の木材や木曽檜など、樹齢400年にもなる木材を用いて復元を行いました。特に見てほしいのは伝統的な木組み。当時の大洲城の写真や雛形をもとに建てられたので、よりリアルにその時代へ思いをはせることができます。構造や細かな技法を見てもらうことが、ものづくりの大切さや伝統を守ることの意味を考えるきっかけとなればうれしいです。

大洲城復元委員を務めた
大工の菅野 隆次さん

領の支配規則を定めた「給人諸法度」を作りました。これは、中世及び戦国時代の支配体制を排除し、藩主から任命された庄屋による支配体制を確立させようとしたもので、後世の領政の規範となりました。

大洲城天守閣の創建についてはっきりとしたことは分かっていませんが、藤堂高虎か脇坂安治の時代に建てられたと言われています。また、大洲城の天守閣は脇坂安治が洲本から**移築したという説もあります。**その理由は、洲本城に残る天守台（天守下の石垣）にあります。洲本城は、現在も石垣や石階段など多くの遺構が良好な状態で残り、国史跡に指定されています。その天守台や周辺の石垣の寸法を調べると、現在の大洲城の天守台や台所櫓、高欄櫓下の石垣の寸法とほぼ一致するのです。もしかしたら、大洲城の天守閣は洲本からはるばる移築されたものかもしれません。

その後、安治は、1614年の大坂冬の陣で、秀吉への旧恩を思い、自分はその戦いに加わらず、家康の内諾を得て息子の脇坂安元を出陣させました。そして、翌年、家康に隠居を許された安治は、安元に家督を譲りました。安治は、1617年に信濃国飯田城（長野県）に移り、大洲城には加藤貞泰が入城しました。

賤ヶ岳七本槍とは

1583年4月、近江国賤ヶ岳で豊臣秀吉が柴田勝家・佐久間盛政たちと戦った「賤ヶ岳の戦い」のとき、秀吉の家臣で勇名をはせた加藤清正、福島正則、加藤嘉明、平野長泰、脇坂安治、糟屋武則、片桐且元の7人のことを言います。

城郭の移築

当時は城郭の移築が頻繁に行われていたようです。例えば、明智光秀が居城した坂本城は近江の大津城に、その大津城の天守は、彦根城の天守に移築されたことが分かっています。